

まちへ出ておこなった地域連携、施設連携の事業 ～鳴く虫と郷町～

伊丹市昆虫館 主任学芸員 坂本 昇

●生きた昆虫の博物館

伊丹市昆虫館は、兵庫県伊丹市にある、住宅地に囲まれ緑が多い公園内に1990年に開館した昆虫の博物館だ。展示の中心となっているのは「生きた昆虫」たちである。半円ドーム型の「チョウ温室」では伊丹産と沖縄産のチョウが1年中1000匹あまり放し飼いにされている。生態展示室にはナナフシやタガメなど多様な昆虫たちが暮らしている。標本の展示や図書コーナーなどもあり、3000平米に満たない建物に昆虫や自然に関する様々な要素を詰め込んだ博物館である。



図1 チョウ温室

来館者は年間約14万人で、近隣地域のこどもを交えた家族連れが多い。年間600団体と、遠足シーズンには主に小学校3年生以下、幼稚園や保育所のこどもたちが訪れる。そのため、展示の仕方や解説はこどもが理解しやすく大人も共に楽しむことができるように、また、興味関心がない人でも安心して入っていけるようにと意識している。また常設展示のリニューアルはできていないが、企画展、プチ展示等の名称で期間限定の展示を年間8回から10回程度おこない、展示の新鮮さを保つよう努めている。ユニークな企画が多いと来館者からも好評である。

展示以外でも「生きた昆虫」という強みを生かした多様な事業を実施してきた。各種の講座や観察会の開催、友の会の支援、学校や幼稚園などと協力しておこなう授業のほか、近年では、市内施設、地元商店街、近隣の博物館と手を組んだ事業にも積極的に取り組んでいる。景気の低迷による財政状況の悪化と来館者数の伸び悩みに苦しむなかで、6名いる学芸系職員はあれこれと知恵を絞り活動している。

●鳴く虫と郷町：まちに響く虫の「音」で地域の「秋」を楽しむ

江戸時代に酒造業で栄え「伊丹郷町」と呼ばれた兵庫県伊丹市の中心市街地を歩くと、どこからともなく「リーン、リーン」という虫の音が聞こえてくる。店先や街路樹などに、およそ15種2,000匹の生きたスズムシやキリギリスなどの「鳴く虫」が展示され、その声を聴かせているのだ。古くから日本では鳴く虫の声を秋の風情として楽しむ習慣があり、鳴く虫のほかに



図2 スズメシ

も秋の習慣がたくさんある。地域性を絡めた複数の展示やイベントでこれらを紹介し、人々に秋の訪れを楽しんでもらい、地域を好きになってもらうのがこの事業のねらいだ。虫の「音」を軸として、地域一帯がまちぐるみで盛り上がる事業、それが「鳴く虫と郷町」である。

2009年は9月4日から12日の日程で開催された。4回目となるこの事業は、文部科学省の「博物館ネットワーク推進事業」として実施した。

●地域の資源をつなげる：参加商店約100、関連イベント30。プラネタリウム、市議会、音楽ホール、美術館も。

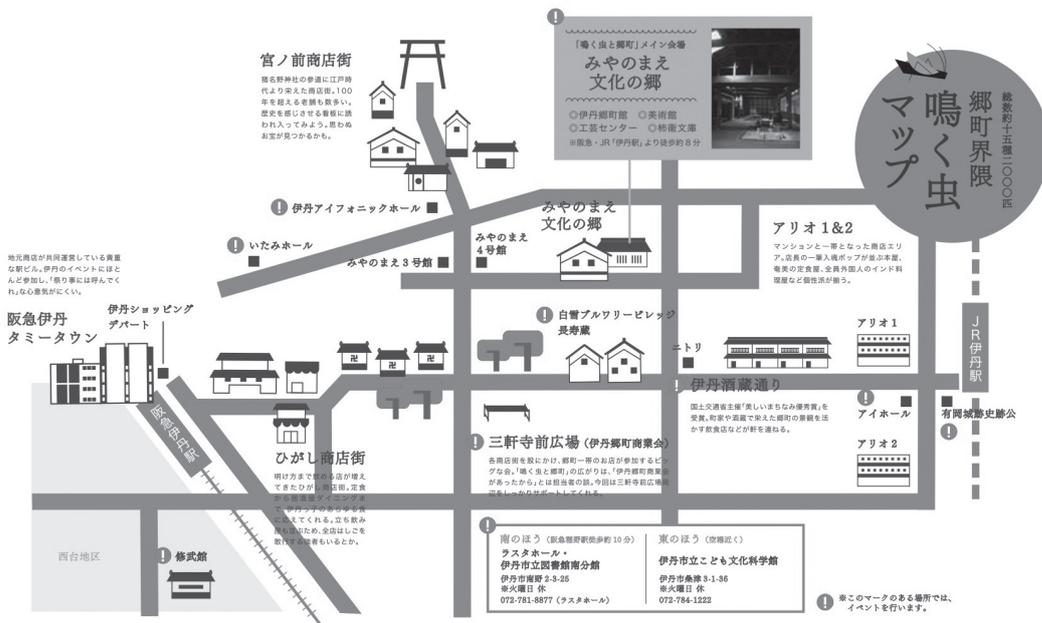


図3 鳴く虫と郷町の開催範囲

この事業の特徴は、地域の商店街や市内の博物館、団体などが制作者の一員として参加し、一緒に展示やイベントを作ったところにある。中心になったのは財団法人伊丹市文化振興財団と伊丹市昆虫館だが、合わせて20もの商店街、博物館、団体が参加した。商店街の人々はまちのことを熟知しており、博物館や団体は地域を基盤に専門的な活動を行っている。歴史や文化、自然だけではなく、働く人々や彼らが培ってきた経験、地元への愛着心などを含むすべてがまちの「資源」と言えるだろう。

これらの「資源」とも言える人々や施設同士はゼロから繋がったわけではなく、関係が構築されつつある現状がすでにあった。商店街とのつながりは、財団法人伊丹市文化振興財団が市街地での音楽イベントなどで培った信頼関係とネットワークが活かされている。市内にある各

種の博物館や施設とのつながりは、市内の博物館や施設の職員が集まった交流会のなかで提案されたものだ。市内に幾つもの施設があるにもかかわらず、これまで協力して事業を行うことはほとんどなく、資料借用や個別の交流にとどまっていた。その背景には各施設が組織的につながっていない現状がある。しかし職員間に連携の意志はあり、数人の呼びかけで2008年の春に業務外で交流会を開催した。その際に行った本事業への参加提案が、幾つもの施設、団体が参加するきっかけとなった。各業務の合間を縫っての参加であったが、この経験は今後の交流と協力体制作りにも意義があるだろう。人々の交流によって、新たなアイデア、新たなネットワークも産まれる。これもこの事業で目的としたことである。

●鳴く虫と「秋」をテーマにした多彩な展示とイベント



図4 伊丹郷町館内の鳴く虫展示



図5 来場者で賑わう伊丹郷町館
左は伊丹市立博物館による伊丹のお月見展示

「鳴く虫と郷町」でおこなった展示やイベントの多くは、基本的に各々がすでに行ってきた事業をアレンジしたり、組み合わせたものだ。組み合わせただけでも、複合的な分野にまたがるイベントはこれまでにはない魅力を放ち、新たな利用者層の興味関心を引きだすイベントになる。それぞれの専門家が担当するので、突っ込んだ内容にも対応できる。この方法は、開発の労力や費用を最低限に抑えることもできる。イベントはそれぞれの博物館や団体が企画し、自ら実施する。全く新たなイベントもあるが、特に全体のテーマから逸脱しない限り、歓迎する考えだ。そうした中で期間中に開催した展示やイベントは、併せて30ほどとなった。

「鳴く虫と郷町」のメイン会場は、中心市街地内にある伊丹郷町館の旧岡田家酒蔵（重要文化財）と旧石橋



図6 スズムシが入った壺を置いた商店

家住宅（県指定文化財）である。これらは江戸時代の建築物で、一般公開されている。この座敷や土間に、鳴く虫を竹籠や壺、瓶に入れて展示した。それらに加え、初秋の季節にちなんだ展示を行った。これらは市内の博物館や団体が制作したものを同じ会場に集め、組み合わせたのである。財団法人伊丹市公園緑化協会が秋の七草などの植物展示、伊丹市立博物館が地域のお月見飾りの展示、財団法人柿衛文庫が鳴く虫を題材にした俳句の短冊を展示した。同じ会場では伊丹市立美術館による虫を題材にした服飾作家の展覧会もおこなわれた。このように、昔ながらの町屋の雰囲気の中で虫の声を楽しむだけでなく、虫を見に来た人が地域の習慣について知る機会となったり、俳句の短冊を見に来た人が題材となった昆虫を目の当たりにできるようになった。鳴く虫は夜間に鳴く種が多いため、期間中の週末は通常午後6時の閉館時間を午後9時まで延長した。

商店街では参加店舗が竹籠や飼育ケースに入った鳴く虫を店内や軒先などで展示した。展示中の飼育作業などは各店主がおこなった。店舗のほかに中心市街地内にある広場や街路樹にも週末限定で竹籠と飼育ケースを配置して、道行く人々に虫の声を楽しんでもらえるようにした。商店街のひとつ伊丹酒蔵通りでは、期間中の週末の夜に、商店会による行灯を用いたライトアップが行われた。開催時期の9月上旬は、日中は暑さが残っているが夜には過ごしやすくなる。通りには夕涼みを兼ねて虫の声を楽しむ人々が多く訪れた。

関連イベントの内容も昆虫だけでなく、音楽、俳句、植物、天文など連携各団体の事業を、鳴く虫や初秋にちなんだ内容にアレンジして実施した。会場はメイン会場の伊丹郷町館だけでなく、実施者の都合で他の場所でも行われた。たとえば「鳴く虫プラネタリウム」は伊丹市立



図7 行灯でライトアップされた商店街



図8 音楽ホールでの弦楽コンサート。
スズムシの入った壺をホール内に配置した。



図9 「鳴く虫おやこ句会」のようす

こども文化科学館にて「お月見」をテーマにしたプラネタリウム上映をスズムシの音が響く中でおこなうものである。「鳴く虫おやこ句会」は俳諧の博物館、柿衛文庫の「句会」と伊丹市昆虫館による「鳴く虫のギャラリートーク」を組み合わせて、展示している生の昆虫の解説の後で各々が俳句を詠むというものだ。音楽ホールでおこなわれた、虫が鳴く中での弦楽コンサートは、楽器の音によって鳴き声も変化して聞こえ、観客に新鮮な印象を与えていた。

●企画展からまちなかへ：開催経緯と制作体制

伊丹市昆虫館では1993年ごろから2005年まで、ほぼ毎年秋に「秋の鳴く虫」をテーマにした展覧会を開催してきた。「鳴く虫と郷町」は、この展示を観覧した、財団法人伊丹市文化振興財団で音楽イベントなどを担当していた中脇健児氏の提案からはじまったものである。その企画は、鳴く虫を伊丹郷町館で展示し、その会場でコンサートなど関連イベントを行うものである。中脇氏の主張は江戸時代の建築物の中で、鳴く虫を昔ながらのイメージで展示すると季節感が演出できるというものだ。

伊丹市昆虫館では、この企画は前向きに受け容れられた。ひとつめの理由は、企画展「秋の鳴く虫」は「多くの人々に実際に野外で声を聴いてもらい、季節を感じてもらふこと」を目的としていた。そのため、生き物にそれほど関心や予備知識を持たない人々にも親しんでもらえるよう文化的側面にも注目した内容とし、館内の展示空間を和風のしつらえに演出していた。そのような経緯から、実在の歴史ある建物内での展示は、博物館内での演出よりもそれらの目的を果たしやすいと期待したからである。

またふたつめの理由として、中心市街地で事業を行うことで、新たな利用者層の開拓と共に人々に館の存在を示したいという意志があった。伊丹市昆虫館は地域の人々に身近な自然と親しんでもらいたいという想いで活動しているが、市内からの来館者は全入館者数の2割ほどにすぎない。その一因として中心市街地から直線距離にしておよそ2km離れ、決して公共交通機関も便利とは言えない現状がある。そこでこちらから交通の便がよい中心市街地へ出て行くことは、市内の人々に対する当館の活動を拡大する機会になると期待した。

さらに、提案された企画内容が企画展のために蓄積してきた経験や資料を活用することができ、労力や予算を抑えつつ開催できると考えられたことも、理由であった。

当初は発案した伊丹市文化振興財団の事業に伊丹市昆虫館が協力するという形ではじまったが、展示の成功と規模拡大の兆しを受けて2年目から伊丹市昆虫館も主催者として加わることになった。伊丹市文化振興財団は全体統括と音楽系を中心とした文化系のイベント、商店街とのやりとりを中心におこない、伊丹市昆虫館は全体統括の補助的役割と展示昆虫の準備や昆虫に関するイベントなどを主に担当している。商店街や他の博物館、施設などは協力者として関わり、共に内容を相談しあい、作り上げている。関係者が多いため直接顔を合わせての会議は最小限とし、情報交換にはメーリングリストを活用している。メーリングリストは単なる業務連絡にとどまらず、議論や励まし合いの場ともなっており、信頼関係の構築やモチベーション

の維持にも役立っている。

●反応：地域の人々が風情を感じ、まちを再認識する

伊丹郷町館内で行ったアンケートから、来場者の属性を見てみよう。年齢層は「30代」が一番多く30%、次いで「60代以上」が23%。来場者の地域は「伊丹市民」が39%、「近隣市町」が26%となっていた。来場した目的は「秋の風情を感じるため」が一番多く33%、次いで「関連イベントに興味があった」が31%である。

アンケートの自由記入欄に寄せられた代表的なコメントは以下のようなものである。

「日本の風情を感じた。本当に良い雰囲気感動」

「鳴く虫を身近に感じる事が出来ました。子どもの頃以来で懐かしかったです」

「街全体で取り組んでいるのか良かった」

「地域を大切にしている様子がよく分かった」

「伊丹に住んで何年かになるが文化にもすぐれていると知れてよかった」

これらの意見から、地域の人々、特に大人が多く来場し、来場目的も主催者たちが考えたものと大きくずれてはいないようである。また自由記入のコメントからは、地域の価値を人々に再認識していただくことができたと考えられるだろう。

まちじゅうで盛り上がった事業は、マスコミからも多いに注目された。計40件の取材を受けただけでなく、市の広報誌でも一面のほぼ全面に掲載され、多くの市民が知るイベントとなった。

●伊丹市昆虫館がまちへ出た効果

伊丹市昆虫館にとって、本事業は連携事業というだけでなく来館者と異なる層の人々を狙って館外の活動を行ったという側面がある。その効果を検討しておきたい。

まず、この事業の来場者層と伊丹市昆虫館の通常の来館者層の違いを見てみたい。前述したアンケート結果と伊丹市昆虫館の2008年度特別展「夏休みむしさんこんにちは」（以下、昆虫館特別展）来場者アンケートから、回答者の属性を比較してみよう。「鳴く虫と郷町」では最も多い年代が「30代」の30%、「伊丹市民」が39%に対し、昆虫館特別展では、最も多い年代は「小学生」で48%。「伊丹市民」は21%、と大きく異なっている。アンケート時期が異なるため確実な比較ではないが、この事業が通常の来館者層とは異なる人々に対して実施できたと考えることができよう。

数値として露わになる効果以外にも、まちへ出た事による意味は大きい。来館していない人々と直接意見交換することは、ふだん博物館がどのような印象で見られているかを認識する良い

機会になる。まちの人々や多様な博物館の人々と共に活動することも、さまざまな角度からまちの事を知る良い機会になる。これまで、博物館と市民とのつながりは一部のヘビーユーザーや友の会会員が中心だったが、「鳴く虫と郷町」では、来場者や商店の方々と直接会話をし、お礼を言われるようになったことは、館内での活動と少し異なる手応えを感じられるものであった。

実のところ、この事業が入館者増につながったという実感はない。しかしこの事業を通じて、館がまちの一員として活動を続けていく可能性を実感することができたこと、多くの方々に館の価値を知っていただき、支援して下さる方が多くいることを感じられたことは、困難な状況にさらされている博物館にとって大きな成果である。

●これから

この事業は、当初は他の事業の片手間ではじめたものだった。しかし年々規模が大きくなるにつれて、運営やイベント開催にかかる労力が増大している。また、多くの組織が関わり、事業の方向性づけの問題も出てくる。多くの方から注目され、「中心市街地活性化」と関連してしばしば語られるようにもなった。制作者達は「ぼちぼちいこう」を合言葉に、みんなで相談しながら、今後もゆっくり続けていこうという雰囲気である。

そして伊丹市昆虫館はあくまでもこの事業に博物館活動として関わっており、今後もそれはかわらない。連携事業の中では博物館と異なる目的を持った団体と共に活動することもあるが、博物館の目的を明確に意識しながら培ってきた専門性を活かすことで、人々の学びを支援するという博物館の役割を果たすことができると考える。そのような連携こそが、お互いの良さを引きだし、結果として内容の充実とともに連携先との関係強化につながるだろう。

この事業は商店会や各施設などの人々が「楽しんで」携わったからこそ続いていると考えている。制作者たちは自分たちが楽しむことをとても大切にしている。その気持ちが来場者につたわり、人々を楽しませると思っているからだ。制作者たちは立場が違い、目的も課題も異なっているが、それぞれが自分の得意分野で力を発揮すること、無理せず気軽におこなうこと、自らが楽しむことを大切にすることで、連携体制をさらに強固なものとし、人々がまちを好きになる事業として続けていけるのではないだろうか。